



Title	動詞の研究 : 動詞の動詞らしさの発展と消失
Author(s)	高橋, 太郎
Citation	大阪大学, 1995, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39349
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	高橋 太郎
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 1 6 2 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 7 年 1 月 1 1 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 名	動詞の研究 —動詞の動詞らしさの発展と消失—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 宮島 達夫 (副査) 教 授 真田 信治 助教授 仁田 義雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、動詞の意味と機能が、動詞の形態論的なカテゴリーと動詞のかかわる統語論的な構造とにどのように影響するかについて、大量のデータをつかって実証し、動詞の種々の用法を記述したものである。筆者は「動詞は終止形がウ段でおわる用言である」のように形態に重点をおいて意味を無視した一面的な定義はとらず、意味的には動作をあらわし、機能的には述語になり、形態的にはテンス・ヴォイスなどのカテゴリーをそなえた単語を典型的な動詞と考え、それが派生的な用法においてどう変化するかを研究の対象とした。述語以外の派生的な用法としては、「よんだ本」のような連体法、「よんで、本箱にしまう」のような中止法、「よんだら、しまっておけ」のような条件法などがある。第1部では、形態論的な分析が＜形態は意味と機能に規定される＞という原理を土台にして記述されている。第2部では、動詞が名詞を修飾する際の連体句節のタイプが動詞の性格と密接な関係にあること、つまり統語論的な分析がなされている。

本論文は、A5判(38字×30行)本文433ページ、400字づめ換算約1234枚の分量をもつ。

第1部「動詞の動詞らしさとその変化」は、動詞の動詞らしさとはなにか、動詞らしさは、どのような場合に、どのように変化していくか、ということをあつかっている。

第1章「動詞の動詞らしさ」は概論である。品詞は、①語彙的な意味、②文中での機能、③語形のありかたの観点から分類された単語の種類である。そのなかで、動詞は、①基本的に運動をあらわし、②文中で述語になることを主要なはたらきとし、③ムード・テンス・アスペクト・ヴォイスなどのカテゴリーによって活用する単語の種類である。典型的な動詞は、これらの性格を完全にもっている。しかし、動詞グループの周辺にある動詞は、これらを不完全にしかもっていない。たとえば、「ある」とか「関係する」のような、運動をあらわさない動詞がそうである。

第2章「動詞の機能にかかわる動詞らしさの変容」のテーマは動詞の機能の変化にともなう形態論的な性格の変化、およびその転成過程の問題である。動詞の機能は、述語として終止用法にあらわれるのが本来のものである。その機能がずれると、機能が形態を規定し、形態論的なカテゴリーも限定されたものになる。ここでは、この事実を、連体形・中止形・条件形について実証した。たとえば、終止法でみられるテンスの対立は、連体形では中和することがある

(「娘をもつ母親」と「娘をもった母親」とは同義である)。中止形・条件形には、そもそもテンス的対立がない(「もち～もって」「もてば～もったら」はテンスの対立ではない)。そして、極端な場合には、ほかの品詞に転成する。たとえば、いつも修飾語につかわれる中止形「とんで」は「とんで出てきた」のように情態副詞化する。「地上の徳よりすぐれてとうとい」の「すぐれて」は「ずっと」と同様の程度副詞にかわった。条件形は中止形とちがって、ことがらを現実と関係づけるモーダルな意味をもっているのに、中止形より独立性がつよく、主節との関係が複雑になり、接続助詞のような方向にすすむものがでてくる。たとえば、「右の手があがったかとみると、サッと光線をきって」の「みると」などは、もとの意味がうすれて、あとの節との関係をしめすはたらきがつよくなり、「みると」を「おもうと」にかえてもよいということまでできている。中止形からでた副詞や連体形からでた連体詞(「ものなれた、ちょっとした」)については、これまでも注意されてきたが、筆者は名詞のうしろについて形式化した動詞を後置詞とよんで、そのくわしい記述をしている。

[連体形から] <～に>関する、よる、対する；<～を>めぐる

[中止形から] <～に>関して、よって、対して；<～から>みて

[条件形から] <～に>よると；<～と>いうと；<～を>みると

第3章「ヴォイス、テンスのカテゴリーとその変容」では、はじめに、ヴォイス的対立の概観がなされ、機能と意味の変容によるヴォイスからの解放の問題がとりあげられている。たとえば、「天井からつるした電燈」と「天井からつるされた電燈」とは実質的には同義である。テンス的な対立の中和は、上に連体形についてみたが、じつは終止形でもないことはない、として、その例を列挙している(1人称の感情表現「こまるなあ～こまったなあ」、発言と同時の行為「ここにおきますよ～おきましたよ」、存在の発見「あ、いる！～いた！」など)また、否定形では肯定形よりもテンスの中和がすすむことがある例として、質問に対する答えでは過去の事実を現在形で表現する事実がある(「いくらで買ったの」→「買いやしない。かりてきたんだ」)をとりあげている。さらに、動詞との比較において、形容詞のテンスをあきらかにした。形容詞は運動をあらわさないが、アクチュアルな状態をあらわす場合にはテンスの対立があるのに対し、特性をあらわす場合には、非過去形(現在形)がテンスの意味をもたない。

第4章「現代日本語動詞の発展」では、通時的な変化、明治から現在にいたるテンス・アスペクト・ヴォイスの変化とその要因を考察した。言文一致以後の口語文のなかでも、こまかく観察すると文法的な変化がみられるのである。たとえば、戦前の小説では「すでに～した」「まだ～しない」の方が「すでに～していた」「まだ～していない」よりも多かったのだが、戦後はこの比率が逆転している。現在の評論のうけみ文の主語が8割以上非情物であることは、ヴォイスの発達(ヴォイスが被害とか有情性などからはなれて、動作参加者と文メンバーとの関係という論理・陳述的なカテゴリーに純化していく過程)という言語近代化のあらわれと考える。また、標準語と京都弁の、動詞の活用対比をとおして、たがいの影響によるカテゴリーの内部構造の変容のありかたを特徴づけた。

第2部「動詞の連体句節と名詞のかかわり」は、動詞の連体形が形態論的な性格をかえていくものになる、連体句節と名詞の関係をあつかっており、この問題ととりくんだ、奥田靖雄・仁田義雄・奥津敬一郎・寺村秀夫などの研究を発展させたものである。

第1章「動詞の連体修飾法(1)」では、連体関係の基本的なタイプが提案された。それらは、叙述規定・具体規定・内容規定・条件規定・形式規定の5つである。この5つは、並列されているものではなく、もっとも基本になる叙述規定から叙述―具体規定、叙述―条件規定などの中間段階をへて、ほかのタイプに移行するものである。また、タイプごとに、その関係をつくりだす名詞の語彙的意味の性格がしめされた。普通名詞は叙述規定を、類概念名詞は具体規定を主としてつくる、などである。

第2章「動詞の連体修飾法(2)」は、動詞句と名詞の関係が、動作と動作参加者の関係なのか、それとも属性と属性のもちぬしの関係なのかという、基本的な問題を提起した論文である。この問題に対する答えは、本章のなかでも結局未解決におわっているが、具体的な各種の関係は、豊富に記述された。

第3章「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」は、100ページにおよぶ大作であるが、ここでは、連体動詞句と名詞の関係を二重の関係としてとらえている。(1)「ドアのそとに去る彼」では、動詞句は動作の主体を修

飾し、(2)「この家へいれる家具」では、動詞句は動作の客体を修飾している。同様に、(3)「工場ではたらく人」では主体を、(4)「父親をまつた神だな」では客体を修飾している。これは、動詞本来の、格支配という名詞に対する関係からみた分類である。ところが、一方、(1)(2)では特定の動作と主体・客体との関係が問題になっているだけで、それ以上のものではないのに対し、(3)(4)では動詞句が「人」「神だな」に対する属性的なものへ、若干移行しつつある。筆者は(1)(2)のような修飾を<関係づけ>、(3)(4)のような修飾を<属性づけ>とよぶ。前者は名詞のしめすものを現実と関係づけ、動詞は格支配やヴォイス・テンス・アスペクトなど、動詞らしさをたもっている。後者は名詞指示物の内的な属性をしめし、動詞的なカテゴリーがくずれて、形容詞に近づく。関係づけから属性づけへの変化は、動詞句が、連体修飾という名詞に対する従属的な性格に変化する過程である。これは、前章で筆者の提起した問題に対する、いちおうの答えである。そして、このほかに、<内容づけ>（「子どもの死んだしらせ」）、<特殊化>（「積立金を消費した事実」）、<具体化>（「わらっているかっこう」）という3つのグループをたて、これら合計5つのグループについて、その下位区分を精細に記述していく。たとえば、<関係づけ>の下位には、ア.参加者イ.状況ウ.後続者エ.その他があり、「ア.参加者」の下位にはまた主体／直接的な客体／あいて／かかわりさき／くっつき場所など9種類が区別される、といった具合である。さらに、これらの関係を決定する条件はなにか、という問いをだし、基本的には動詞句と名詞のカテゴリカルな意味だが、それ以外もかかわる、とする。

第4章「連体動詞句をうける名詞の二つの側面」は、単語に、連語のレベルでは修飾をうけ、構文のレベルでは拡大をうける、という2つの側面があることをのべたものである。名詞にも、役わりの性格と存在論的性格の両側面があって、そのことが、連体句節と名詞の関係を規定する。たとえば、「相談」という名詞は、「いっしょに東京へでてくる相談」では、言語活動をしめすという役わりの性格の側面、「二度にわたる相談」では、できごとをしめすという存在論的な性格の側面がはたっている。この二つの側面は、動詞句のかかわりかたをしめす名詞の性格ともつながる。「おしえる相手の生徒」「行列を形成する要素たる個々の数」の「相手」「要素」は役わりをしめす名詞であり、「丸太をつみあげたつくりの玄関」「おどくるう形で歩きだした」の「つくり」「形」は、存在論的な上位概念をしめしている。

論文審査の結果の要旨

本書は、近年不毛の状態に近い品詞論の分野での重要な収穫である。日本語文法における品詞論は、形態論の研究が中心だった戦前には、山田孝雄・橋本進吉・時枝誠記など主要な文法論のなかで、かなりの比重をしめていた。しかし、構文論に比重がうつった戦後は、研究者の関心が品詞論からはなれ、見るべき成果をうんでいない。このことは、とくに動詞の場合に、いちじるしい。副詞などとちがって、日本語の動詞は形態的に他の品詞と容易に識別でき、ほとんどまぎれる余地がないからである。一方、動詞は文構造の中心になる単語だから、動詞をめぐる研究はおおいが、それらは、ヴォイス・アスペクトなど個々のカテゴリーの解明と、それにもとづく動詞の下位区分とにしばられ、品詞としての動詞全体を対象とするものではない。

しかし、動詞に関するこれらのくわしい研究をもとにして、あたらしい段階の品詞論を展開できる段階にきた。それを実証したのが本書である。それは、かつての品詞論のように、単に動詞と形容詞や名詞との境界線をひくためのものではない。もっとも典型的な動詞が、どのような意味的・文法的な特徴をもち、それが周辺的な動詞において、どのように変化して他の品詞にちかづくか、という、動詞全体の内部構造をあきらかにするものである。かつての抽象的な品詞論にかわって、それは、カテゴリーと用法との相互作用に関する、ゆたかな内容をそなえており、品詞論以外の動詞研究で、ここ数十年のあいだに蓄積された成果のうえにたつものである。

じつは、本書におさめられた諸論文の執筆にあたって筆者の念頭にあったのも、品詞としての動詞全体よりも、その部分的な内容をなす個々の事実の解明であっただろう。たとえば、連体節に関する研究は、寺村秀夫氏のものとならんで、その後の諸氏の研究の出発点となったものであるが、その執筆にあたって、将来この成果が動詞の品詞論の

なかでしめるべき位置についてまで、筆者がプランをもっていたかどうかは、疑問である。品詞論的な構想は、おそらく、部分の解明の過程で徐々に発展したものであろう。しかし、一定の方法論のもとに、各部分の事実を忠実に扱いもとめた結果は、集大成されてみると、ある側面から動詞全体のありかたを記述した本書の姿になったのである。

「動詞の条件形の後置詞化」(第1部第2章第4節)、「スルともシタともいえるとき」(第1部第3章第3節)、「うけしのテンスについて」(第1部第3章第4節)など、本書のなかで筆者がはじめてとりあげて記述した、細部にわたる事実はおおいが、これらを、いちいち紹介・論評する余裕はないので、ここでは、とくに、筆者が＜形態は意味と機能に規定される＞ことを品詞論の原理として提唱し、実証したことの意味を指摘したい。動詞の各側面は、並列的にあるのではなく、形態論的カテゴリーは構文的な機能(とこれにともなう語彙的意味)に規定される。もっともゆたかな形態論的性質をもつのは、動詞の基本である終止用法である。そして、たとえば、「流れにそう家々～流れにそった家々」におけるテンス的対立の消失、「天井からつるした電燈～天井からつるされた電燈」におけるヴォイス的対立の消失は、これらの動詞が連体法にあるという派生的な構文機能と、これにともなう動作的意味から性質の意味への移行とに、規定されているのである。本書の考察は、すべてこの原理の証明である、といってもよい。これによって、中心から周辺へと、品詞の全体を体系的に記述する方法がえられた。この原理を明示的に提出しただけでも、品詞論における本書の役割は重要である、とまとめられる。

本書を特徴づける研究方法上の特色としては、主観的な作例をさけて、豊富な実例を収集し、そこから帰納的に論をすすめたこと、通時的な変化と共時的なゆれとを区別して、その双方に注意をむけたこと、細部にわたる記述においても、つねに動詞のカテゴリー全体に関する配慮をわすれていないこと、などがあげられる。

筆者は、また、動詞連体句の研究において、＜構文においては拡大成分が拡大される成分に従属する＞という統語論的な原則を意識的に適用し、実証した。「かれは彼女からきた手紙をよんだ」という文の動詞句と名詞との関係は、構文からみれば、「手紙」が「きた」の主体であることよりも、「彼女からきた」が「手紙」を現実と関係づけていることのほうが基本的である。なぜなら、この動詞句は拡大成分なのだから。このことから、連体成分の関係を決定するものは、基本的には名詞のカテゴリカルな意味である、という命題がみちびかれ、動詞と名詞との関係を分析するなかで、具体名詞・場所名詞など名詞の下位分類についても重要な知見がえられた。それは、もう単なる意味的な区分ではなく、文法的な区分だといえるのである。本書の主題は動詞だが、このようにして、名詞の品詞論にも確実な基礎を提供していることを指摘しておく。

本書は、最初から一貫した計画にそう品詞論として書かれたものでないための重複や非体系性がみられる。格支配の面からする動詞の下位区分についての記述をおぎなえば、品詞論としては、より完全なものになったであろう。外国における品詞研究をあまり参照していないことは残念である。これらの欠点はあるが、上述のような意義からみて、本審査委員会は、本論文が学位請求論文として十分な価値を有するものと判断する。